

ペン俳句会 句会報(三三六号)

令和四年九月一日(木)

兼題『露』、席題『野』

感染状況改善の兆しが見え、大津さんお手配の日本倶楽部での初句会を開催。

宮原 凧

秋風の吹きわたりにくる浄心門  
露けしや姉妹相ひ寄り墓終い  
秋桜を活けて野の風生まれけり  
カナカナを供に夕餉の買い物へ  
虫の音と一人で遊ぶ十七音

首藤 しずを

疲れたる葉月の海や遠白帆  
白露に食器光れる山の膳  
新涼や音立てて食む京野菜  
落蟬のそこだけ刻の止まりたる  
風立ちて冬大根の種時きぬ

浜口 須美子

蜘蛛の囿に露ちりばめて雨あがり  
湯の揺れにまかす身の揺れ虫の声  
花野ゆく袖振る君に風あまし  
足もとに傘をまわして秋の露  
百万匹の螢潜むか露きらら

松田 一文字

露草の葉に置く露や空の青  
野宮なる山頂越しの大銀河  
能楽堂出れば闇裂く稲光  
雨あがり空に湧き次ぐ秋あかね  
一雨後の闇にかがやく大文字

大津 そうかい

稲妻や磐石なりし母の膝  
戦野の灯とならむ流れ星  
秋茜遮断機上を颯爽と  
秋澄むや吾が顔見入る手水鉢  
揺るる葉や三つが一つに露の玉

中村 晃也

呼び声を風が追ひ越す花野かな  
旅果ての野面を渡る夕時雨  
出迎へし女の肩の露涼し  
束の間に消へる宿命や草の露  
枯野めく牧に溢れる日差しかな

安藤 晃二

中天や巨き雲分け盆の月  
一番ティー露の野面の浅間まで  
路地裏に宵の灯待つや秋海棠  
タジマハールへ椰子林を抜け露光る  
こほろぎの合唱包む遊歩道

長尾 進一郎

新涼やデパ地下を出て歩の軽し  
不思議なる太古の光天の川  
故郷に向かふ野の道秋の色  
昨年に劣らぬ活気虫の声  
草露を集めズボンの裾重し

森田 元斐

木漏れ日に揺れる野点や法師蟬  
少年の声澄む川原鷺数羽  
デパートに救ひ求めて秋暑し  
短冊へ墨たつぷりと芋の露  
青き穂の真直ぐに立つや秋初め

志村 良知

朝作り庭草早も露載せて  
亡骸のか細く透けて法師蟬  
朝顔の明日は幾つと蔓辿る  
凌霄花の縄跳びの子に合はせ揺る  
花札は此を写せしや葉月の野

高橋 由紀子

転げ合ひそしてぼろりと芋の露  
野分すさび嵐が丘に立つ心地  
夏の服吊るしたままに秋は来ぬ  
天高く藍濃き川に鷺の立つ  
初月や夏のあまは去り行きぬ

新田 ゆふき

盆休み暖簾ゆらゆら甘味処  
蝸の天空さらひ閉めてゆく  
秋立つと山紫に那須野かな  
白露や草葉に消えし秀吉公  
釣り人のつつと一足蟬時雨

内藤 まりこ

蟬声（せんせい）や精一杯に空に満つ  
墓参り高校野球を聞きながら  
雨台風景色をけむらせ叩き尽け  
翳雲絞りの羽織でも着たし  
露光る二十世紀の肌白き

西川 知世

窓ひとつ小暗く灯し月の家  
秋めくや雲の端ほどく野辺の風  
軒ひさし持たぬ街棲み秋燕  
露踏んで宿を出る朝靴軽し  
駅頭にパン売る車葉月果つ

次回は令和四年十月六日（木）、  
兼題は宮原凧さん出題の「夜長」、  
「長き夜」、席題は西川知世さん  
出題の「美」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十月の兼題は、秋の時候の季語「夜長」傍題に  
は、長き夜・長夜（ちようや）・夜長し。

本来、夜の長いのは冬なのだが、夏の短夜のあ  
とは、ことのほかつよく感じるところからきてい  
る。読書、夜なべ仕事など句材はたくさんある。

古句に

山鳥の枝踏かゆる夜長かな

蕪村

長き夜や目覚むるたびに我老いぬ

樽良

夜永さに筆とるや旅の覚書

几董

など。春は「日永」、夏は「短夜」、冬は「短日」  
と実際の昼と夜の長短ではなく、昼と夜にたいす  
る人の気持ち、寂しさ、物思わせるときの静けさ  
などに重心をおく季語である。

父母の夜長くおはし給ふらん

高浜虚子

夜長人耶蘇をけなして帰りけり

前田普羅

襖絵の烏夜長を躍り居る

原 石鼎

鍋の耳しづかに山の夜長来る

村越化石

蛇酒のとろりと澄んで来る夜長

中島杏子

よそに鳴る夜長の時計数へけり

杉田久女

長き夜や生死の間にうつらく

村上鬼城

ふりむきし顔の夜長の灯くらがり

長谷川素逝

長き夜や妻にしたがふ事もあり

伊奈秀嶺